音 楽 科

甫出　頼之

１　はじめに

音楽科は，従来，学習発表会や合唱コンクールといった学校行事との関係が深く，学級運営とも連携を図ってきた。また，教師の指導のもと，学級単位の一斉指導を中心に合唱や合奏を行う場面も多かった。しかし，コロナ禍が始まり，多くの学校でこのような活動の中止を余儀なくされた。現在，徐々にコロナ禍以前の状態に戻る動きも見られるが，授業や学校運営への影響は続いている状態である。

令和３年１月，中央教育審議会によって示された「「令和の日本型教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」では，2020 年代を通じて実現すべき「令和の日本型教育」として，多様な子供たちを誰一人取り残すことのない「個別最適な学び」と，これまでの「日本型学校教育」で重視されてきた「協働的な学び」を挙げ，それらを一体的に充実し，様々な社会的変化を乗り越え，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが示されている。その実現のために，GIGA スクール構想によって充実がはかられた ICT，特にタブレット端末は，一斉指導の学習だけでなく，「個別の学び」や「協働的な学び」の可能性を広げた。

こうした可能性を踏まえ，これまでの実践とも最適に組み合わせながら，コロナ禍に対応するだけではなく，コロナ禍後を見据えた新たな学びを実現させたい。

２　音楽科本来の魅力

スワニック（2004）は，音楽について，「人間という種族の歴史と同じくらいに古い歴史を持つ対話の様式であり，自分自身や他の人々に関する考え方を，鳴り響く形式の中で明確に表現する手段」であり，「対話として，私たちの自分自身についての理解や，私たちを取り巻いている世界について理解を深め，人生をより豊かにしてくれるという，重要な役割」を果たす，いわば，「私たちが知る，考える，感じるための一つの方法」であると述べている。

日本における音楽科教育は，徳育や啓蒙といった「音楽外の効能」や生徒指導や学校行事といった「学校儀礼に果たす役割」によって正当化される歴史を辿ってきた。しかし，これは「教科としての音楽を無用化する論拠」になり得る。音楽科教育の本来の働きは，音楽を通して様々な知の世界とつながり，考え感じることによって，自己を省察し，変容させることなのである（今井 2019）。

以上を踏まえ，音楽科では，「音楽についての対話をすることをとおして，世界をより深く理解し，人生を豊かにすること」を「音楽科本来の魅力」と捉え，学習活動においては，これまでに積み重ねてきた音楽的な経験，新しく経験する音楽をもとに，自分自身や他者と対話をしながら音楽について思考し理解を深め，その価値を自ら見つける過程を大切にしたいと考えている。

資質・能力	視点	資質・能力の具体
授業構想力	目標設定	・生徒がこれまで親しんできた音楽や音楽的な経験や体験を基盤としつつ，未知・未習の内容に意欲的に取り組むことができる目標を設定する。
	教材研究（開発）	・音楽や音楽文化のもつ本質的な価値を捉え，生徒に付けたい資質・能力と関わらせた教材を開発する。
授業実践力	指導技術	・音楽科を教えるために必要な，楽器の演奏や歌唱などの技能。 ・指揮と指示，範唱，ノンバーバルな働きかけといった指導技術。 ・生徒が活動を行う際，生徒を見守る時と生徒に介入する時の見極めをするなど，生徒と適切に関わる。 ・ICT 機器を使用して教材を理解しやすく提示したり，生徒たちに ICT 機器の適切な使用を指導したりする。
授業分析・評価力	授業分析 評価	・瞬間的に生徒の演奏表現を捉える。 ・授業実践を省察し，実践的知識を更新する。

【表 1】教師の資質能力（音楽科）

３　音楽科本来の魅力に迫るための資質能力

では，「音楽科本来の魅力」に迫るために，教師には，どのような「資質能力」が必要であろうか。

まず，「授業構想力」として，生徒がこれまで親しんできた音楽や音楽的な経験を基盤とした授業を設定する力やこれまでに蓄積された音楽文化や楽曲を分析し教材化する力を挙げている。これらはいずれも，生徒が意欲的に学習に取り組み，より深い経験を得るために必要な視点であると考える。

次に，「授業実践力」として，教師の音楽的技能やそれに支えられた指導技術，生徒の様子を見極め適切に関わる力，適切に ICT 機器を使用する力を挙げている。楽器の演奏や歌唱といった音楽的技能は音楽科教師として当然必要な力である。指揮と指示，範唱，ノンバーバルな働きかけといった教師の指導技術は，授業実践のためには必要で，教師としての経験によって蓄積されていくものである。生徒と適切に関わる力や ICT 機器を生徒が効果的に利用できるように指導する力は，「個別の学び」や「協働的学び」を一体的に充実し「主体的・対話的な授業」を行うためには重要である。また，ICT 機器を使用して，生徒に対してわかりやすく教材を提示することも，教師自身が身に付ける技能であると考えられる。

最後に「授業分析・評価力」として，瞬間的に生徒の演奏表現を捉える力や授業実践を省察し，実践的知識を更新する力を挙げている。演奏表現はその場，時間限りの一瞬で消えるものである。その為，教師は常に生徒に注意を払い，演奏の技能，表現の工夫，そこに込められた思いや意図などを瞬間的に捉え，それを的確に評価して伝える必要がある。また，授業実践を省察し，実践的知識を更新していくことにより，授業実践が改善されていくと考えられる。

３　研究の経緯

昨年度まで，広島大学附属東雲小学校・中学校は「『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を育むための学びを豊かにする授業の創造」というテーマをもとに実践研究を進めてきた。主体性・多様性・協働性の３要素をキーワードに考え，これらを内包した協働的問題解決の生起を促す授業を行うことによって，子供たちの資質・能力を育成することをねらって研究を進めてきた。音楽科でめざす子ども像について，主体性・多様性・協働性に整理して以下に示す。

主体性：自分の思いや意図を豊かに表現できる姿
　　身に付けた知識・技能などの活用方法を自ら判断する姿
多様性：音楽を愛好し，音楽の多様性について理解する姿
協働性：他者と協働しながら創意工夫をいかして表現する姿

本校では，児童・生徒の主体性・多様性・協働性を培う学びを日々実践しており，さらに９年間積み重ね続けていくことによって，「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を志向する学びを実施してきた。

４　研究の目的・方法

今年度は，これまでの授業実践をもとに「音楽科本来の魅力に迫るための資質能力」を設定し，「音楽科本来の魅力」に迫る授業を構想，実践する。そして，次の２つの視点で考察を行う。

①生徒・児童が「音楽科本来の魅力」に迫ることができているか。
②設定した「音楽科本来の魅力に迫るための資質能力」が適切であったか。

【引用・参考文献】

今井康雄（2019）「学校教育と音楽　なぜ学校で音楽を教えるのか」日本音楽教育学会編『音楽教育研究ハンドブック』音楽之友社，pp.26-27.

スワニック，キース（2004）『音楽の教え方　音楽的な音楽教育のために』塩原麻里・高須一共訳，音楽之友社

田中里佳（2019）「音楽科を担う教師の「高度な実践力」とは何か―先行研究の検討からの考察」『音楽教育実践ジャーナル』vol.17，pp.16-25.

中央教育審議会（2021）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」，インターネット．https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm.（2021/8/7 にアクセス）

文部科学省(2018)『小学校学習指導要領解説　音楽編』東洋館出版社.

文部科学省(2018)『中学校学習指導要領解説　音楽編』教育芸術社.